

国際看護教育におけるシラバス構築の基礎研究

Research on the Basic Syllabus Structure in International Nursing Education

○松尾まき¹

Maki Matsuo

1 東京医療保健大学

Tokyo Healthcare University

【背景と目的】

多様で急速に変化している社会状況の中で、地域社会、国際社会から求められる看護職の役割が拡大する中、基礎教育における国際看護のあり方が検討されている。国際看護教育の現状報告によると、教員側の課題として、教授内容の範囲が広く、教育時間が不足すること、自分の経験では内容に限界を感じるなどがあげられる(宮本, 2017)。学生側の課題では、国際看護の基礎となる社会学、歴史、民族学的視点に関する能力獲得の意識が低く、国際化への関心が薄いことがある(中越, 2014)。そのため、教育内容の整備が指摘され、多文化対応力をもつ看護師の育成が必要とされている(戸田, 2019)。

これらの課題と同時に、看護学教育モデル・コア・カリキュラム(文部科学省, 2017)のねらいに示された「国際社会・多様な文化における看護の役割」、「国際社会における保健・医療・福祉の現状と課題」、「看護が提供される多様な場と生活の場の特性」、「多様な場に応じた看護実践」を踏まえ、各大学の教育理念に基づきシラバスを作成する必要がある。

本研究の目的は、WEB公開された大学シラバスの構成要素から、看護基礎教育における国際看護教育のシラバスを作成するための基礎資料を得ることである。

【方法】

2022年4月12日に検索エンジン:マイクロソフトエッジを利用し、WEB上で「国際看護」「シラバス」のキーワードにより収集できた、2022年度の国際看護に関するシラバスの検索を行った。18ページ分を検索し、新たな検索結果が得られない段階で終了した。対象シラバスから講義名、基準単位数、開講年次、区分、講義形態、授業内容を分析した。

本研究は、すでに公開されているシラバスを対象としているため、研究者所属機関の研究倫理審査を受けていない。

【結果】

19件の対象シラバスが検索された。国公立大学5件(26.3%)、私立大学14件(73.7%)であり、そのうち4件(21.1%)は研究者が所属している大学のキャンパスごとのシラバスが含まれた。

講義名については、国際看護論4件(21.0%)、国際看護学7件(36.8%)、その他、国際看護学概論、国際看護活動論、国際保健・看護、グローバルヘルスなどであった。基準単位数は、1単位が16件(84.2%)、2単位が2件(10.5%)、1件(5.3%)は記載がなかった。1単位の大学は全8回、2単位の大学は全15回の授業計画となっていた。開講年次は、1年次、2年次、3年次、4年次それぞれ、3件(15.8%)、3件(15.8%)、7件(36.8%)、4件(21.1%)であり、1件(5.3%)のみ2~4年次で開講されていた。1件(5.3%)は記載がなかった。区分については、必修

科目8件(42.1%)、選択科目5件(26.3%)であり、他6件(31.6%)については記載がなかった。講義形態では、講義、グループワーク、ディスカッションを組み合わせ実施しているところが7件(36.8%)あった。その中で、視聴覚教材、新聞教材の活用や、海外の国際支援活動現場から中継講義を実施し、インタビューを行う工夫もされていた。講義のみの形態が2件(10.5%)あったが、国際看護学概論やグローバルヘルスと看護Iとして開講されていた。

授業内容に関しては、世界の健康問題として自国や各地域での健康課題、グローバルヘルスの概念についての記載、保健・医療システムや国際協力活動、国際協力団体などについての記載、文化的背景を考慮した看護の役割や活動、看護のアプローチ等について授業概要に掲載されていた。

【考察】

2022年度の各大学のシラバスは、2017年の看護学教育モデル・コア・カリキュラムや2018年の日本看護系大学協議会の看護学士過程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標を踏まえた内容になっていると期待される。現在の指定規則上では、国際看護は統合分野に位置づけられているが、3、4年次開講が6割弱であり、残り3割は低学年での開講である。1、2年次は必修単位数も多く、履修上厳しい側面も考えられるが、国際的視野を拡大するためには1年次からの開講や、複数学年による段階的な取り組みが必要ではないだろうか。

授業開講数の限られている大学は、少ない時間の中でもアクティブラーニングが行われていた。授業の内容については、世界の健康問題から国際看護を学ぶ意義、各システムや国際協力に関すること、国際看護の場と対象について異文化、多文化を考慮した看護の役割を捉えていた。このことは、国際看護学に関する教科書の構成要素と合致していた(辻村, 2022)。

【結論】

国際看護教育は、限られた時間数の中で多岐にわたる内容を教授する必要があり、1年次より国際看護に触れ、4年次になるまで計画的に積み上げていくことが求められる。

【利益相反】本研究における利益相反はない。

【引用文献】辻村博美ら。(2022). 国際看護学に関する教科書の構成要素の分析、日本国際看護学会誌、5(2)、10-17.

戸田登美子ら。(2019). 甲南女子大学における国際看護教育に関する取り組み、国際臨床医学会誌、2(1)、22-24.

中越利佳ら。(2014). わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題、愛媛県立医療技術大学紀要、11(1)、9-13.

宮本和子。(2017). 看護基礎教育における「国際看護」教育の現状と課題、山梨大学看護学会誌、16、1-5.